

Title	植民地時代初期ブラジルにおける先住民奴隷制に関する一考察
Author(s)	東, 明彦
Citation	大阪外国語大学論集. 33 p.131-p.146
Issue Date	2006-03-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79983
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「植民地時代初期ブラジルにおける 先住民奴隷制に関する一考察」⁽¹⁾

東 明 彦

Sobre a Escravidão Indígena no Brasil-Colônia (Séculos XVI-XVII)

AZUMA Akihiko

Este trabalho visa analisar alguns aspectos da escravidão indígena no Brasil-Colônia (séculos XVI-XVII). Em primeiro lugar, trataremos dos aspectos gerais das relações entre índios e colonos desde o início da colonização até os primeiros anos do século XVII. Em segundo lugar, analisaremos as características da legislação indigenista dessa época, enfatizando o fato de que “a Coroa produziu uma legislação indigenista contraditória, oscilante e hipócrita” (Beatriz Perrone-Moisés). Em último lugar, procuraremos compreender a característica da política indigenista da Coroa Portuguesa, analisando principalmente os conceitos da “guerra justa” e “resgate” em que os portugueses se baseavam, ao pensar em escravizar os índios brasileiros.

序論

1500年3月(つまり、ヴァスコ・ダ・ガマがインドへの航海を終えてポルトガルへ帰国してから半年後)、第2次インド遠征艦隊がリスボンを出港した。第2次艦隊は、ペドロ・アルヴァレス・カブラルを司令官に、大型帆船(ナウ船)9隻と機動力に優れたカラヴェラ船3隻、それに食料補給船1隻の合計13隻からなる大艦隊で、総勢1500人が分乗していた。カブラルの艦隊は、南大西洋の南東貿易風およびベンゲラ海流・赤道海流を回避するため、赤道付近でアフリカ大陸から離れ、ガマの艦隊よりもさらに大きく西に迂回する航路をとった。その結果、艦隊は1500年4月22日、南米東海岸、現在のブラジル・バイア州南部地方に到達した。これが、いわゆるブラジル「発見」である。ポルトガル人は翌4月23日、海岸にいる7、8人のブラジル先住民(トゥピ語系先住民)を初めて目撃した。⁽²⁾

植民地時代の16・17世紀、ブラジル先住民に関するヨーロッパ人の記録には、型にはまったいくつかの画一的なイメージが見られた。そのひとつは、先住民の言語にはF, L, Rの3文字が欠如している、そのため、先住民にはFé(信仰)もLei(法律)もなく、Rei(王)もいない、つまり、文明社会に不可欠な要素がすべて欠けている、と断じたもので

あった。⁽³⁾ さらに特徴的な先住民像は、「ブラジル先住民＝人喰い」というイメージであった。先住民は「日々残忍な戦争を行い、互いに相手を食う」⁽⁴⁾ という類の記述は、航海者、宣教師、植民者、官吏の別なく、また記録者の国籍を問わず、当時の記録に共通していた。⁽⁵⁾ そして、そのようなイメージは、ただ単に先住民を「野蛮人」とみなすという結果を招いただけではなかった。「ブラジル先住民＝人喰い」という先住民像は、すでに別稿⁽⁶⁾ で論じたように、「新世界の植民を進める上で最も便利な二つのイメージ、－すなわち、殉教者としての白人と異教徒としての先住民－を構築する力をもっていた。」つまり「殉教は、『人喰い』の政治的支配を正当化し、異教信奉は、先住民をキリスト教へと改宗させる〔ヨーロッパ人の〕権限を正当化することになった」⁽⁷⁾ のである。

本稿は、そのような点を踏まえて、ブラジル植民地時代初期の先住民法を分析し、「先住民＝人喰い」の観念が、先住民法の中にどのような形で取り入れられ、また先住民奴隷化とどのような関わりをもったのかについて、植民地の当時の状況を念頭に置きながら具体的に考察することを目的としている。そこで第1章ではまず、当時のポルトガル人と先住民インディオとの関係を概観し、第2章では、先住民法の中で、先住民奴隷化と緊密な関係をもつ主要な法令を検討する。そして最後に、先住民奴隷化を実質的に正当化した「レスガテ（身請け・救済）」制度を取り上げ、ポルトガル王室の先住民政策の特色を論じることとする。

1. 植民地時代初期のポルトガル人＝先住民関係

ブラジルのトゥピ語系の先住民は、アマゾン川流域地方南部にその起源があり、長期にわたる移動・拡大の結果、南米東部海岸地方の先住民であるマクロ・ジェ語系の先住民を沿岸部からはば駆逐し、1500年当時、ブラジル北東部から南東部にいたる海岸地方を支配していた。彼らは、マニオクを中心とする焼き畑農業および狩猟・漁労を主たる生業とし、半定住の生活を送っていた。その政治・社会組織、信仰体系などは、西欧社会とも、アジアの社会とも著しく異なっていたし、1520年代以降スペイン人が遭遇することになる、人口が稠密で高度な文化を有するアステカ、インカの社会とも大きな相違があった。⁽⁸⁾

スペイン領アメリカの場合とは異なり、ブラジルでは貴金属の鉱床は17世紀末（1693－95年）まで発見されなかった。また先住民の生活は自給自足を原則としており、彼らの間に「商業的な交易」は存在しなかった。そのため、アジアとの交易に関心が奪われていた当時のポルトガル人にとって、「発見」直後のブラジルは経済的な観点からは魅力的な存在ではなく、新しい土地に対する関心は小さかった。例外的にヨーロッパ人の関心を引いたのは、スオウの一種で、赤色染料の原料となるブラジル木（pau brasil, brazilwood）だけであった。焼き畑農業において森林の伐採を「男性の仕事」と考えていた先住民にとって、ブラジル木の伐採および海岸部への運搬は受け入れ可能な労働であり⁽⁹⁾、労働力とヨーロッパ製の鉄製品（斧、釣り針、ナイフ etc.）・装身具類との交換（バーター取引）はある程度円滑に機能し、当初は両者の関係は比較的安定していた。⁽¹⁰⁾ 鉄製の斧は、焼き畑農業の森林伐採に大きな威力を発揮し、先住民にとってきわめて魅力的な道具であった。

このような比較的安定した関係に変化が生じるのは、16世紀中葉になってからである。ブラジル木の交易に関心を示すフランス⁽¹¹⁾の進出を前にして、ポルトガルの王室は、「領土」の喪失を恐れて、植民地ブラジルの経済的開発を意図した。ブラジルは気候をはじめとする自然環境が砂糖生産に適していたし、ポルトガルは大西洋のマデイラ島や赤道直下のサン・トメー島ですでに砂糖生産の実績があった。したがって、貴金属の鉱床が発見されない以上、植民地開発の決め手として、当時、高価な「商品」であった砂糖の生産をブラジルに導入しようとポルトガル王室が試みたのも、なんら不思議ではなかった。⁽¹²⁾

16世紀中葉、黒人奴隷は高価な「商品」⁽¹³⁾であり、植民地ブラジルにおける萌芽的な砂糖生産の労働力として黒人奴隷を大量に使役することは、現実的ではなかった。⁽¹⁴⁾ また、ポルトガル本国から農業労働者を導入するのも、ポルトガルの人口が1527-32年当時100-150万人⁽¹⁵⁾にすぎなかったことを考慮すると、実際的な選択肢ではなかった。

結局、残る可能性は、先住民労働力の利用であった。上述のように、ブラジル木の伐採や輸送にはすでに先住民労働力が用いられていたが、砂糖生産に先住民労働力を使役するには、問題がいくつかあった。一つは、トゥピ語系の先住民は、森林の伐採は男性の仕事として受け入れたが、農作業自体は彼らの考えでは女性の仕事⁽¹⁶⁾であったため、男性がそれを嫌ったことである。もう一つは、より本質的な問題であるが、砂糖生産には、継続的に重労働に従事する多数の労働力が必要であり⁽¹⁷⁾、物々交換（バーター取引）で入手できる不安定な労働力では不十分だったことである。その他にも、砂糖農園主とブラジル木の交易者との間で、先住民労働力を物々交換で入手する上で競合が生まれていた点も見逃せない。この競合により、労働力の対価として先住民に渡す品物はますます高価なものになっていた。そして、先住民が労働の対価に火器を要求するようになると、それは治安上の理由からポルトガル人が拒否するようになり、物々交換による労働力入手は、ますます困難を極めた。⁽¹⁸⁾ そのような事態を打開するため、ポルトガル人植民者は、先住民の奴隷化を試みることになった。⁽¹⁹⁾

2. 先住民の奴隷化と先住民法

16世紀中葉、ブラジルへの砂糖生産導入にともない労働力の確保は火急の問題となり、植民者は先住民の奴隷化に強い関心を示した。一方、1549年ブラジル初代総督トメ・デ・ソウザとともに布教のためブラジルに来訪したイエズス会士は、先住民奴隷化が改宗の障害となると考え、植民者による先住民奴隷化の試みに反対した。植民者と宣教師、両者の働きかけを前にして、王室は先住民奴隷化の問題に関してむずかしい選択を迫られることになった。⁽²⁰⁾

もっとも、ポルトガル王室の先住民政策の原則は、16世紀中葉、つまりブラジルの植民化が実質的に始まったとき、その基本線はすでに定まっていた。すなわち、ブラジル領有の権原(Título)がローマ教皇アレキサンデル6世の「贈与大勅書」に由来するものである以上、1548年国王ジョアン3世が総督トメ・デ・ソウザに宛てた「規約(レジメント)」にあるように、「ブラジルの土地の植民を命じた主な動機は、その地の住民をわが聖なるカ

トリックの信仰に改宗させることだった」⁽²¹⁾ のであり、それは露骨な先住民奴隷化と相容れるものではなかった。さらに、アメリカ大陸の先住民が人間であるか否かという問題も、新世界の先住民が真の人間であると宣言した、1537年6月2日付ローマ教皇パウルス3世の大勅書「Sublimis Deus」で事実上決着がついていた。⁽²²⁾ また、1580年から1640年までスペイン国王がポルトガル国王を兼ねたハプスブルグ王朝期には、「新世界の先住民インディオは自由人であり、不正に奴隷化されてはならない」⁽²³⁾ というスペイン植民法の原則は、ポルトガル植民地にも大きな影響をおよぼすことになった。⁽²⁴⁾

ポルトガル王室がある程度体系的なブラジル先住民政策を打ち出したのは、国王ジョアン3世が初代総督トメ・デ・ソウザに宛てた上述の「規約」においてであった。⁽²⁵⁾

「規約」によると、ブラジル植民の主目的は、先住民のカトリック信仰への改宗であった。そして国王の考えでは、改宗化を進め、さらには入植地を拡大し交易を増大させるためには、先住民の改宗化は平和裡に行なう必要があった。したがって、たとえ先住民が蜂起した場合でも、総督や地方長官（カピタン）の許可なしに先住民を襲撃（「サルト」と呼ばれた）したり、戦争を仕掛けることは禁止された。違反者には、死刑や財産の没収という厳罰が科された。国王はその理由として、しばしば植民者が平和に暮らす先住民をさまざまなやり方で襲撃・略奪したり、また彼らを騙してその敵に売り渡したりしたので、先住民が蜂起し、キリスト教徒に戦争を仕掛ける結果を招き、それが現在の無秩序の主因となっているという事実を挙げている。

「規約」の文言からは、王室が、植民者による先住民部落への「サルト（襲撃）」と無秩序な奴隷化が植民地に混乱をもたらしているという現状を認識し、それに歯止めをかけようとしたことが分かる。

ただし、「規約」において、国王は、先住民をポルトガル人にとって「友好的な先住民」と「敵対的な先住民」に二分し、前者を保護する一方で、後者には「正当戦争」を発動し、強制的に服従させるように指示している。つまり、友好的な先住民に対しては、土地や集落の譲渡を許可し、「[[先住民の] 改宗者は、[ポルトガル人の] 入植地の近くに居住させるようにせよ。キリスト教徒と接触することで、文明化はより容易になるであろうから。」と述べる一方で、敵対する先住民に対しては、戦争を仕掛け、彼らの集落や居住地を破壊し、彼らを殺害もしくは捕虜とし、和平交渉の過程で捕虜とした首長の何人かを、見せしめのためにその集落において処刑するよう命じている。⁽²⁶⁾

実際、1548年の総督制の成立以来、国王や総督はいくどか敵対する先住民の討伐を行い⁽²⁷⁾ [つまり、正当戦争を発動し]、その戦争で捕虜となった先住民の奴隷化を許した。一方、国王の方針にもかかわらず、植民者も依然として、労働力の不足を補うため、独自に先住民の奴隷化を試みた。それに対し、イエズス会士は各地に教化村を設立し、植民者による先住民の奴隷化に反対した。

植民化がいっそう進展し、先住民問題が重要性を増してくると、若き国王セバスティアン1世は、エヴォラにおいて1570年3月20日付けで先住民問題に関するブラジルで最初

の法令を発し、「ブラジルの地で〔ポルトガル人が〕先住民を奴隷化する非合法的な手段の弊害が大きいのを知り、そのような非合法的な手段を禁止し、次の先住民を除き、いかなる手段によっても、先住民の奴隷化を禁止する」と命じた。⁽²⁸⁾そして、同法令で奴隷化禁止の例外とされたのは、(a) 国王もしくはブラジル総督の許可を得た正当戦争で捕らえられた先住民、(b) ポルトガル人を襲撃する先住民、または人喰いの目的で他の先住民を襲撃する先住民であった。例外規定にもとづき先住民を奴隷化した場合、2ヶ月以内に在ブラジルの財務官事務所にその先住民を登録する必要があると規定された。⁽²⁹⁾

例外規定の (b) 「ポルトガル人を襲撃する先住民、または人喰いの目的で他の先住民を襲撃する先住民」の後半部分は、「ポルトガル人に対していっさい攻撃がなされない場合でも、先住民を奴隷化する抜け道となった」点に注意を要する。⁽³⁰⁾

1570年の法令にある、弊害の大きい「非合法的な手段」というのは、1548年の「規約」で言及されている「サルト（襲撃）」のことだけではなかった。実は、植民者にとって、先住民奴隷化の口実として最も好都合であったのは、当時「レスガテ〔身請け〕もしくは「救済」の意〕と呼ばれていた方法であった。「レスガテ」とは、先住民間の戦争での捕虜を「人喰い」の犠牲となるのを防ぐという名目で植民者が身請けし、その代償として捕虜を奴隷化するという制度であった。[当時ヨーロッパ人は、ブラジル先住民には食人の慣習があると信じていた。⁽³¹⁾「レスガテ」はしばしば無秩序な先住民奴隷化の単なる口実になっていた。そのため、1570年の法令では、「レスガテ」が禁止されたのである。ただし、「レスガテ」の廃止については植民者の激しい反対があり、また建前上は「レスガテ」には人道的な側面があることから、1573年の国王書簡で「明らかに不正な」「レスガテ」を除き、「レスガテ」は復活することになる。⁽³²⁾

結局、植民者からすれば、「正当戦争」に関する規制ができる限り緩やかであること、および「レスガテ」による奴隷化が、たとえ制限付にせよ、認められることが重要であった。⁽³³⁾

その後、17世初頭にかけて、1570年の法令を前提とした法令がいくつか公布され⁽³⁴⁾、とくにスペイン・ハプスブルグ王朝の国王がポルトガル国王を兼務した時代（1580年－1640年）には、すでに述べたように「新世界の先住民インディオは自由人で、不正に奴隷化されてはならない」という同王朝の先住民政策の基本原則はポルトガルにも大きな影響をおよぼした。⁽³⁵⁾

1595年11月11日、国王フィリペ1世（スペイン国王としては、フェリペ2世）は宣教師の働きかけに応じて、1570年の法令を撤回した上で、1570年の法令における先住民の奴隷化禁止の例外規定をさらに厳しくした勅令を発し、いかなる場合にも、先住民奴隷化を禁止し、不正に奴隷化された先住民の解放を命じた。奴隷化禁止の唯一の例外は、国王自身が指令書によって明確に命令した戦争における捕虜の場合に限定され、その場合にも奴隷として使役できる期間は10年に限定された。⁽³⁶⁾「ブラジルの住民が正当戦争を口実に先住民を奴隷化するために使う、広く一般化した方法を禁止するため」と述べているところからみても、⁽³⁷⁾ 勅令の目的は、1570年の法令における奴隷化禁止の例外規定の第2項、

つまり「ポルトガル人を襲撃する先住民、または人喰いの目的で他の先住民を襲撃する先住民」という項目の乱用を避けることだったと考えられる。

1605年6月5日付の国王フィリペ2世（スペイン国王としては、フェリペ3世）の指令書は、1595年の勅令よりさらに一步踏み込み、「たとえその奴隷化に相応の正当な理由があるにせよ、ブラジル先住民の奴隷化を禁止する。先住民の奴隷化は、結局は弊害のほうが大きく、大切な改宗活動を妨げるからである。また奴隷化の禁止は、ブラジル総督領のよき統治と平和の維持に好都合だからである。」⁽³⁸⁾と述べており、1609年に公布される先住民奴隷化の全面禁止を規定した法令の先駆けといえる。

そのような流れの中で制定された1609年7月30日付の法令⁽³⁹⁾は、正当戦争の権原を否定したものではないが、正当戦争を含め先住民の奴隷化が植民地の統治におよぼすマイナスの影響を憂えて、「一切の先住民奴隷化」を禁止しようとしたものであった。そして王室は新たに設置されたバイア控訴院に命じて法令の厳格な施行を目指したので、植民者が受けた衝撃は大きかった。

国王フィリペ2世は、その法令の中で、すべての先住民インディオは自由であると宣言し、不正に奴隷化された先住民の即時解放を命じた。国王が法令を制定したのは、ブラジルのイエズス会士からバイア地方のジャグアリベで多数の先住民が不正に奴隷化されたという情報が伝えられたからである。⁽⁴⁰⁾

国王フィリペ2世は、なんらかの名目で先住民の奴隷化を許可した場合に起こりうる弊害を避けるために勅令を公布するとし、次のように命じた。「ブラジルの地の先住民はすべて、生来の権利により自由である。それは、洗礼を受け、我が聖なるカトリックの教えを受け入れた先住民も、未信者として自分たちの儀礼や慣習に従って暮らしている先住民も同様である。先住民はすべて、自由な人として扱われ、その意思に反して労働やその他のことを強制されず、彼らを農場で使役する者は、他の自由人に対するのと同様に、彼らにもその労働に応じた賃金を支払わなければならない。」⁽⁴¹⁾

国王はさらに、「先住民の保護を図り、彼らが各地方の住民と、自由かつ安全に居住し、また交易できるようにしなければならない。なぜなら、そのことが、余の役に立ち、総督領の財政に恩恵をもたらすからである」と述べ、「各地方の総督や住民が奥地から先住民を連行する際に用いる欺瞞行為や暴力行為を完全に停止する」よう命じた。⁽⁴²⁾

先住民の教化については、イエズス会による先住民の集住政策を支持し、総督に教化村建設のための土地を与えるよう指示した。そして、農作業に先住民を使役する場合、イエズス会士も彼らに賃金を支払わなければならないと定めた。他方、先住民の租税免除を規定し、先住民からの租税の徴収を禁止した。そして最後に、その時まで不正な手段で奴隷化された先住民の解放を規定した。その規定は、植民者には看過することのできないものであった。

1609年の法令が公布されると、各地で植民者の不穏な動きが起こった。リオデジャネイロでは反乱の兆しが見られ、パライバでは、フィリペアの市参事会が、法令はハブスブルグ朝スペインのブラジルへの介入であると公然と非難した。そして最も激しい反応を示し

たのは、植民地ブラジルの首都バイアであった。

バイアにおいては、市参事会の弁護士、ガスパール・ゴンサルヴェスを指導者とする植民者の激しい抗議活動が起こり、彼らはイエズス会士をすべての元凶であるとみなし、バイア市からの追放を求めた。植民者がまず問題としたのは、新法が不正に奴隷化された先住民の解放を規定し、さらにはそれに対するいかなる異議申し立ても認めない、としていた点である。植民者は、総督とバイア控訴院主席判事ガスパール・ダ・コスタに対して公式に抗議を行ったあと、政府の建物やイエズス会の学院へ押しかけた。イエズス会士は群衆の怒りを静めるため、自分たちは法の制定過程には関与していないと懸命に弁明せざるを得なかった。

さらに、市参事会の代表、ジョルジェ・ロペス・ダ・コスタは、イエズス会士に対して、新法が「神と国王陛下にとって大きな害悪であり、総督領全体に損害を与えるものである」と記した文書に署名するよう強く迫った。署名しない場合には、イエズス会士をバイア市から追放すると脅したと伝えられている。⁽¹³⁾

イエズス会士はその文書への署名を拒否したものの、(a) 合法的に奴隷化された先住民は解放されない、(b) 家庭で使役されている自由な先住民は連れ去られることはない、(c) イエズス会士は植民者の事業に使役されている先住民を教化村に収容するつもりはない、という内容の別の文書に署名し、その場をしのぐしかなかった。⁽¹⁴⁾

その事件に関し、総督は植民者に好意的であった。総督は、国王宛書簡で、植民者にとって先住民労働がいかに重要かを力説し、新法がもたらす「何千もの不都合」を強調した。その中で、総督は、インディオを奥地から沿岸部へと連行するのは有益であり、それを禁止すると、労働力の不足が生じる、また先住民をイエズス会士の教化村に居住させるのは、イエズス会士を益するのみで、植民地社会全体には役立たない、と述べている。⁽¹⁵⁾

1609年の法令が植民者にとって不都合であったのは、上述のように、自分たちの所有している先住民奴隷が「不正な」手段により入手したものとして解放を余儀なくされるおそれがあったことが一方にあったが、より根本的には、1609年の法令のもとでは、植民者が先住民奴隷を入手するために用いてきた手法が完全に否定されたことによる。前述のように、植民者は、「サルト（襲撃）」や「レスガテ」で先住民奴隷を入手していた。非合法的な「サルト」はもとより、「レスガテ」まで完全に否定されれば、それは植民者にとって死活問題であった。

植民地の各地で起こった抗議行動、そして本国へ送られた多数の請願書によって、1609年の法令は、2年後には撤回されることになる。そして先住民問題についての新たな法令が1611年9月10日に制定された。

1611年の法令は、法令の制定理由として、先住民の円滑な統治、および先住民のカトリックへの改宗、ブラジル総督領の平和維持の必要性を挙げたあと⁽¹⁶⁾、「ブラジルの地の先住民はすべて、生来の権利により自由である。それは、洗礼を受け、我が聖なるカトリックの教えを受け入れた先住民も、未信者として自分たちの儀礼や慣習に従って暮らしている先住民も同様である。先住民はすべて、自由な人として扱われ、その意思に反して労働

やその他のことを強制されず、彼らを農場で使役する者は、他の自由人に対するのと同様に、彼らにもその労働に応じた賃金を支払わなければならない。」⁽¹⁷⁾ と、興味深いことに、1609年の法令とまったく同じ文言を繰り返している。

ところが、法令は次に正当戦争に言及し、総督に対して、ブラジルの先住民が戦争もしくは反乱、蜂起を起こした場合には、司教および控訴審の主席判事・判事、修道会の高位聖職者をメンバーとする審議会を設置し、戦争の是非、およびその正当性を審議し、審議結果を国王へ報告するよう命じた。そして、戦争の正当性が承認された場合には、戦争捕虜の奴隷化を認めた。

さらに、1611年の法令には、国王の承認を待てば事態の收拾が手遅れになる恐れがある場合には、総督は自らの権限で戦争を行なうことができると明記されており、事後承認が許容されていた。その場合、捕虜の先住民は、名前、出身地、年齢、捕獲の状況などを帳簿に記録した上で、奴隷にすることができた。ただし、そのような奴隷の売却は、国王の承認が届くまでは禁止されていた。

1611年の法令には、正当戦争とならんで、先住民を奴隷化する根拠とされた「レスガテ」についての規定もある。法令は、「[ブラジルの]先住民は、互いに戦争を行い、通常その戦争で捕らえたすべての者を殺し、食べてしまう。食べない場合もあるが、それは、捕虜を購入する者がいる場合である。先住民の幸福のため、また何よりも大切なことであるが、先住民の魂の救済を望み、他の先住民の捕虜となり、そのままでは食人の犠牲となる先住民を[植民者が]購入し、彼らを奴隷化することを認める。」⁽¹⁸⁾ と規定した。ただし、先住民を購入した者は、その経緯に不正がないかどうか証明する必要がある、奴隷として使役することのできる期間は、10年間とされた。規定上は、一種の「年期奉公人」のような扱いになっていた。

多少の制限は課されたが、ここにきわめて明確な形で「レスガテ」が復活した。「正当戦争」承認の要件の緩和とあわせて考えれば、それはまさに植民者の意向に添った法令であった。結局、1611年の法令は、1609年の法令以前の状態へ逆戻りすることを意味した。植民者の抗議が実質的に王室の政策を変更させたのである。

なぜ、王室は姿勢を後退させ、植民者の要望に不本意ながら従ったのか。それは、結局のところ、ブラジル植民地の性質にかかわっていた。スペイン領アメリカのメソアメリカや中央アンデスとは異なり、貢納を納める数多くの先住民人口に恵まれたわけでもなく、鉱山の富が発見されるまでさらに一世紀近くの年月を要した当時のブラジルでは、経済の基礎は砂糖であった。17世紀初頭、ブラジル北東部では砂糖生産が急速に発展していた。⁽¹⁹⁾ しかし、ブラジルでの砂糖生産は、完全に植民者の資金に依存していた。砂糖きび栽培も製糖も、その経費はすべて個々の植民者の負担であった。砂糖農園主、つまり植民者がいなければ、ブラジルは植民地としての価値がなかった。それを十分に認識していた王室は、最終的には植民者に妥協し、彼らの利害に対して寛大な姿勢を取らざるを得なかったのである。「先住民保護法」の制定（1609年）とその実質的な撤回（1611年）をめぐる動向は、その点を如実に物語っている。⁽²⁰⁾

3. 先住民奴隷化—「正当戦争」と「レスガテ」—

植民地時代ブラジルの先住民政策の基本原則は、先住民保護であった。すでに繰り返したように、無秩序な先住民奴隷化が許可されたことはいちどもなかった。しかし、その一方で、先住民労働力の需要が高まると、王室は植民地開発の観点からある程度の「先住民奴隷化」を黙認せざるを得なくなった。その際、「正当戦争」や「レスガテ」はしばしば先住民奴隷化禁止の例外事項として機能した。「正当戦争」は、その発動が王室や総督などの権限であったため、植民者にとって、自分たちの自由になるものではなかった。ところが、「レスガテ」は、建前は人道的側面があるだけに、植民者にはきわめて好都合な制度であった。そのため、植民地時代を通して不正がはびこり、「レスガテ」が先住民奴隷化の単なる口実として利用されるのは避けられなかった。⁽⁵¹⁾

植民地時代、ポルトガル人は、先住民を主に、「教化村の先住民」「同盟者である先住民」「敵対する先住民」の3種類に区別した。⁽⁵²⁾

教化村の先住民は法的な観点からは自由人であったので、建前上は労働を強制できず、労働には報酬の支払いが必要であった。⁽⁵³⁾ また、同盟者である先住民にも、理論上、自由が保証されていた。同盟者である友好的な先住民には、食料の供給者もしくは賃金農業労働者としての役割とともに、敵対する先住民やフランス人などに対する「盾」の役割が期待された。⁽⁵⁴⁾ それゆえ、「正当戦争」の概念が適用されたのは、「敵対する先住民」に対してであった。

「正当戦争」を発動する主な理由は、(a)改宗活動の妨害、(b)ポルトガル人およびその同盟者に対する敵対行為、(c)王室や植民地政府との間に結ばれた協定の破棄など、相手があらかじめ「正義」に反する行為を行った場合であった。⁽⁵⁵⁾

単に信仰の受け入れを拒絶しただけでは、法的には「正当戦争」を発動する権原とはならず、「武力で福音の受け入れを強制されることはない」とされた。[1655年4月9日付法令⁽⁵⁶⁾]

ブラジル先住民の慣習のひとつであるとヨーロッパ人が信じた「人喰い」は、一般にはそれだけでは「正当戦争」の権原とはならなかった。「人喰い」がその行為のみで「正当戦争」の権原となるとされたのは、1653年10月17日付の国王の訓令だけであった。⁽⁵⁷⁾

いずれにしても、「正当戦争」は、合法的な奴隷化の議論の余地のない権原であったので、その発動は植民者の利害と一致していた。一方、王室は、「正当戦争」が「悪用」されないように、国王直筆の命令以外は無効とするなど(1595年11月11日付けの法令 etc.)、「正当戦争」の発動をできる限り制限しようとした。ただし、正当戦争での奴隷の売却が王室に収入をもたらしたのも事実であり、王室の方針は必ずしも一貫したものではなかった。⁽⁵⁸⁾

一方、「レスガテ」は、「プレズス・デ・コルダ」(首に縄を巻かれた戦争捕虜。縄は捕虜が捕らえられてからの月数を表した。)と呼ばれた先住民同士の戦争の捕虜を、購入により「救出」することを意味した。そのような戦争捕虜は、そのまま放置すれば、殺され、食べられてしまう運命にあると考えられたからである。⁽⁵⁹⁾ したがって、救出された先住民は、

救出した者の奴隷となって当然であると考えられた。⁽⁶⁰⁾すでに指摘したように、「レスガテ」は、不正な先住民奴隷化の温床となった。ただし、少なくとも建前上は人道的な側面があったため、全面的に禁止するのは困難であり、王室は不正な「レスガテ」をできる限り取り締まろうとしたが、実際には、不正かどうかの識別は困難であった。

イエズス会士は当初より、「サルト（襲撃）」や不正な「レスガテ」を告発した。⁽⁶¹⁾宣教師たちの告発を前に、王室は「レスガテ」の禁止を試みるが、結局それは植民者の強い反発を招いた。その結果、王室は一定の譲歩を行うことを余儀なくされた。露骨な先住民奴隷化の承認は論外であったとしても、1611年の法令による1609年法の原則の撤回、換言すれば「正当戦争」の復活と「レスガテ」の承認に見られるように、実質的に植民者の意向に添い、彼らの願望をある程度満足させる必要があった。

ブラジルの歴史家ベアトリス・ペロネ＝モイゼスは、植民地時代ブラジルにおけるポルトガル王室の先住民法について「それは、矛盾があり、一貫性がなく、偽善的であった。」⁽⁶²⁾と評したが、それは、まさにこの意味においてであった。

それゆえ、マヌエラ・カルネイロ・ダ・クニャが言うように、先住民奴隷制は、「植民地時代、何度も廃止された。つまり、先住民奴隷制の廃止が、何度も撤回された」のである。⁽⁶³⁾本稿で述べた、1609年法と1611年法の事例、そしてさらには、1680年法（先住民奴隷化を厳格に禁じた1609年7月30日の法令の復活）と1684年9月2日法（先住民の実質的な奴隷化を黙認）などはまさにその典型的な事例であった。⁽⁶⁴⁾

冒頭で述べたように、「レスガテ」の問題は、単なる法律上の問題にはとどまらなかった。先住民奴隷化の口実として植民者にとって最も好都合であった「レスガテ」は、法的には、先住民が「人喰い」であることを前提としてはじめて成り立つ制度であった。換言すれば、先住民が「人喰い」であることは、先住民の奴隷化を正当化する上で必要不可欠な要素であった。「ブラジル先住民＝人喰い」という「言説」を考える際、この点は重要である。そのような「言説」は、植民地状況においては、例えば1611年9月10日の法令の場合のように、法令の中に取り入れられ、政治的な意味合いをもつことになったからである。⁽⁶⁵⁾

18世紀以降、知識人の間では、先住民インディオの「理想化」が始まり、先住民はポルトガルに対抗する上での「象徴」となっていった。ただし、そのような先住民の理想化・象徴化が進行したのが、支配的な労働力が黒人奴隷に完全に移行し、知識人の中で先住民がすでに「現実の存在」ではなくなった植民地経済の中心地域（ミナスジェライス地方など）においてであったのは、けっして単なる偶然ではなかった。⁽⁶⁶⁾

(1) 植民地時代ブラジルの主要な経済活動は、黒人奴隷制にもとづく、大土地所有制・熱帯性換金作物栽培（砂糖生産 etc.）[16・17世紀]、あるいは金・ダイヤモンド採鉱[18世紀]であった。ただし、輸出向け砂糖生産の中心地であった北東部においても17世紀中葉までは、先住民労働力が重要な役割を担っていたし、輸出経済の周辺に位置したサンパウロ地方や北部のマラニャン＝パラ地方では、それ以降も先住民労働力は大きな役割を果たした。「先住民奴隷制から黒人奴隷制への移行」という社会経済的な観点から先住民奴隷制の問題を取り上げた論考としては、次

- のものがある。Stuart B. Schwartz, "Indian Labor and New World Plantations: European Demands and Indian Responses in Northeastern Brazil", in *The American Historical Review*, 83 (1), 1978, pp.43-79. 布留川正博「ブラジルにおける奴隷制の起源－インディオ奴隷制から黒人奴隷制へ」, 『(同志社大学) 経済学論叢』, 37 (3・4), 1986, pp.129-166. 拙稿「III ポルトガル領アメリカーブラジル」第一章「黒人奴隷制の成立－先住民奴隷から黒人奴隷へ」(柴田秀藤編『ラテンアメリカ史－植民地時代の実像－』, 世界思想社, 1989, 所収, pp.218-240.)
- (2) カミーニャ著, 池上岑夫訳・注, 「国王宛て書簡」[大航海時代叢書 第II期 1 『ヨーロッパと大西洋』所収, pp.179-225], 岩波書店, 1984.
- (3) Gabriel Soares de Sousa, *Tratado Descritivo do Brasil em 1587*, 4th ed., São Paulo, 1971, Brasiliana 117, p.302; Laima Mesgravis, "A Sociedade Brasileira e a Historiografia Colonial", in Marcos Cezar de Freitas (org.), *Historiografia Brasileira em Perspectiva*, São Paulo: Contexto, 2nd ed., 1998, pp.39-56, p.39.
- (4) Sousa, *op.cit.*, p.300.
- (5) (a) アメリゴ・ヴェスプッチ著, 長南実訳, 増田義郎注, 「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集」[大航海時代叢書 1 『コロンブス, アメリゴ, ガマ, バルボア, マゼラン 航海の記録』所収, pp.249-338], 岩波書店, 1965, p.329; (b) "Informação das terras do Brasil do P. Manuel da Nóbrega [aos Padres e Irmãos de Coimbra] [Baía Agosto ? de 1549]" (Serafim Leite S.I., *Monumenta Brasiliæ I [1538-1553]*, Roma: "MONUMENTA HISTORICA SOCIETATIS IESU", 1956, pp.145-154), p.152; (c) ラス・カサス著, 長南実訳, 増田義郎注, 『インディアス史三』[大航海時代叢書 第II期 23], 岩波書店, 1987, 「第一巻第七十四章」(pp.198-204), pp.201-202; (d) Pero de Magalhães Gândavo, *História da Província Santa Cruz*, 1576, Lisboa, (*Tratado da Terra do Brasil; História da Província Santa Cruz*, Belo Horizonte, 1980, Reconquista do Brasil; nova sér. v.12), pp.136-141; (e) マガリャンイス著, 池上岑夫訳・注, 「ブラジル誌」[大航海時代叢書 第II期 1 『ヨーロッパと大西洋』所収, pp.227-325], 岩波書店, 1984, pp.308-317; (f) Sousa, *op.cit.*, p.300; (g) アンドレ・テヴェ著, 山本顕一訳・注, 「南極フランス異聞」[大航海時代叢書 第II期 19 『フランス大陸とアメリカー』所収, pp.157-501], 岩波書店, 1982, pp.321-324; (h) ジャン・ド・レリー著, 二宮敬訳・注, 「ブラジル旅行記」[大航海時代叢書 第II期 20 『フランス大陸とアメリカ二』所収, pp.1-365], 岩波書店, 1987, p.83, pp.222-237; (i) Hans Staden, *Duas Viagens ao Brasil*, (Tradução de Guiomar de Carvalho Franco / transcrito em alemão moderno por Carlos Fouquet) (Título do original alemão, *Wahrhaftige Historia*, 1557, Marburg) Belo Horizonte, 1974, (Reconquista do Brasil, 17), pp.179-188; (j) ハンスターデン著, 西原亨訳, 『蛮界抑留記－原始ブラジル漂流記録－』, 帝国書院, 1961, pp.257-266.
- (6) 拙稿「植民地期ブラジルの先住民像に関する一考察, - W. アレンズ著『人喰いの神話』に対する D.W. フォーシスの批判を中心にして -」, 『Anais - 日本ポルトガルブラジル学会 (AJELB) 年報』(Vol.35, 2005 年) 所収, pp.1-20.
- (7) Alcida Ramos, "From Eden to limbo: the construction of indigenism in Brazil", in George C. Bond & Angela Gilliam (edited by), *Social Construction of the Past-Representation as power-*, London: Routledge, 1994, pp.74-88, pp.80-81.
- (8) ポルトガル人は, ブラジルにおいては結局, 統治機構を有する「国家」とは遭遇しなかった。つまり, 先住民の各村落は, 戦争に際し同盟することはあったが, 政治的には互いに自立していた。Mário Maestri, *O escravismo no Brasil*, São Paulo: Atual, 1994, 9th ed., 1998, (Discutindo a História do Brasil), p.21.
- (9) Florestan Fernandes, "Antecedentes indígenas: organização social das tribos tupis", in Sérgio Buarque de Holanda (sob a direção de), *História Geral da Civilização Brasileira I (A Época Colonial 1, Do Descobrimento à Expansão Territorial)*, São Paulo: Difel, 6th ed., 1981, pp. 75-76.
- (10) *Ibid.*, p.81.
- (11) フランスは, ローマ教皇アレキサンドル六世の勅書「インテル・ケテラ」(1493 年 6 月 28 日公布) およびスペイン, ポルトガル両国のトルデシリャス条約 (1494 年) にもとづく世界分割を認

めていなかった。

- (12) シドニー・W・ミンツ著, 川北稔, 和田光弘訳, 『甘さと権力』, 平凡社, 1988, p.83, p.169. 川北稔著『砂糖の世界史』, 岩波書店, 1996, pp.4-8.
- (13) バイア地方では, 1572年当時, 黒人奴隷の平均価格は25ミル・レイス, 先住民奴隷の平均価格は9ミル・レイスで, 黒人奴隷の価格は, 先住民奴隷の価格の約2.8倍であった。Schwartz, "Indian Labor...", p.77; Stuart B. Schwartz, *Da América Portuguesa ao Brasil -Estudos Históricos-*, (Tradução de Nuno Mota), Alges: Difel, 2003, p.79.
- (14) Stuart B. Schwartz, "Canefield and Factory, The Impact of Sugar Production on Slave Life in Northeastern Brazil", in *Slaves with or without Sugar. Registers of the International Seminar*, Funchal: Atlantic History Study Centre, 1st ed., 1996, p.249.
- (15) A.H.de Oliveira Marques, *História de Portugal*, Lisboa: Editorial Presença, 13th ed., 1997, vol.I, p.269.
- (16) Fernandes, *op.cit.*, pp.75-76; Alexander Marchant, *From Barter to Slavery: The Economic Relations of Portuguese and Indians in the Settlement of Brazil, 1500-1580*, Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1942, (reprinted Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1966), p.64; Alexander Marchant, *Do escambo à Escravidão, As Relações Econômicas de Portugueses e Índios na Colonização do Brasil, 1500-1580*, Tradução de Carlos Lacerda, 1st ed., 1943, 2nd ed.: Companhia Editora Nacional-INL/MEC, 1980, (Brasília; v.225), p.52.
- (17) Schwartz, "Canefield and Factory...", p.251.
- (18) Marchant, *op.cit.*, pp.57-58.
- (19) 総督メン・デ・サールの財産目録によると, 1572年にセルジベ農園には, 黒人奴隷20人に対して, 先住民奴隷男性118人, 女性114人がいた。サンタ・アナ農園にも黒人奴隷9人に対して, 123人の先住民奴隷がいた。Maria Beatriz Nizza da Silva, *História da Colonização Portuguesa no Brasil*, Lisboa: Edições Colibri/Grupo de Trabalho do Ministério da Educação para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1999, p.15.
- (20) Perdigão Malheiro, *A Escravidão no Brasil-Ensaio Histórico, Jurídico, Social-*, Petrópolis: Vozes, 1st ed., 1866-67, 3rd ed., 1976, Vol. I, p.138.
- (21) Serafim Leite, *As Raças do Brasil perante a Ordem Teológica, Moral e Jurídica Portuguesas nos Séculos XVI a XVIII*, Coimbra, 1965, Separata do Vol. III das Actas do V Colóquio Internacional de Estudos Luso-Brasileiros, p.5.
- (22) *Ibid.*, p.6.
- (23) Stuart B. Schwartz, *Sovereignty and Society in Colonial Brazil -The High Court of Bahia and its Judges, 1609-1751-*, Berkeley: University of California Press, 1973, p.123.
- (24) ポルトガル王室は, 先住民のキリスト教への改宗を円滑に行なう目的で, 植民地期の当初より先住民の虐待を禁じた。ただし個々には, 先住民奴隷の本国への輸入を許可した事例がある。初期の例としては, 王室が1502年, ブラジル木の交易を請け負ったロローニャ (Fernão de Loronha) に対し先住民の輸入を許可した事例がある。(Mathias C. Kiemen, O.F.M., "The Indian Policy of Portugal in America, with Special Reference to the Old State of Maranhão, 1500-1755", *The Americas*, 5 (2) [1948], p.144.) また, 国王の指令を無視して, 先住民を本国へ連行した事例もある。例えば, ブラジル木の交易船ブレトア号は, 1511年30名以上の先住民を本国へ連行した。(Malheiro, *op.cit.*, p.155.; John Hemming, *Red Gold, The Conquest of the Brazilian Indians*, London: Macmillan London Limited, 1978, p.10.) カピタニア (領地) の贈与に際して, 国王が各カピタニア領の長官に付与した権限の中に, 一定数の先住民の奴隷化と本国への輸出を許可した文言がある。[1534年, ペルナンブーコのカピタニア領長官ドゥアルテ・コエリョは, 毎年24人の先住民をポルトガルに送ることができた。1534年, ペロ・ロベス・ソウザは, 同様に, 毎年24人の先住民インディオをポルトガルに送ることができ, 翌年にはその数は, 39人になった。] (Malheiro, *op.cit.*, p.158.) さらに, 植民者の中には, 暴力的な手段, つまり「サルト (襲撃)」により, 先住民奴隷を入手しようとした者もあった。1546年12月20日付け国王宛書簡でドゥアルテ・コエリョは, 「サルト」の結果,

- 先住民との平和的な関係が損なわれることを懸念している。(M.B.N. da Silva, *História da Colonização* ..., p.15.)
- (25) 「規約 (Regimento de Tomé de Sousa [17 de Dezembro de 1548]) の原文は, Carlos Malheiro Dias (direcção e coordenação de), *História da Colonização Portuguesa do Brasil, Edição Monumental Comemorativa do Primeiro Centenário da Independência do Brasil*, Porto: Litografia Nacional, 1924, Vol.III, pp.345 – 350 を参照; Malheiro, *op.cit.*, p.165.
- (26) Dias, *op.cit.*, p.345; Malheiro, *op.cit.*, p.166.
- (27) 1560 年代ブラジルに滞在したマガリャンイス・ガンダヴォは, 次のように記している。「ポルトガル人がこれらの居住地に住み始めた頃はインディオがまだその周辺に大勢いたが, そのインディオがポルトガルにたいして叛乱をおこし背信的な行為をくりかえしたので, この地の歴代の総督やカピタンらが徐々に彼らを打ち破りその多くを殺した。ほかに内陸部へ逃げて行った者もいる。その結果, 居住地の周辺には原住民がいなくなった。居住地の近くにインディオの部落 (アルディア) が見られることもあるが, これはカピタニアに住んでいるポルトガル人にたいして友好的で武器をとることのないインディオにかぎられている。」(マガリャンイス著, 池上岑夫訳, 「ブラジル誌」, pp.246 – 247)
- (28) *Collecção Chronológica de Leis Extravagantes, Posteriores à Nova Compilação das Ordenações do Reino, Publicadas em 1603*, Coimbra, Na Real Imprensa da Universidade, 1819, [Por Resolução de S.Magestade de 2 de Setembro de 1786.], pp.131 – 132.
Collecção Chronológica da Legislação Portuguesa (1603–1700), Compilada e Annotada por José Justino de Andrade e Silva, Lisboa: [Imprensa de F.X. de Souza], 1854 – 59, 10 vols., 1603 – 1612, p.271.
- (29) *Collecção Chronológica de Leis Extravagantes...*, p.132.
Collecção Chronológica da Legislação Portuguesa..., p.271.
- (30) M.B.N. da Silva, *História da Colonização* ..., p.15.
- (31) 拙稿「16 世紀ブラジルの先住民と奴隷制」, 科研報告書『「グローバル・ヒストリー」の構築と歴史記述の射程』(大阪外国語大学, 2000 年) 所収, pp.99 – 108 参照。
- (32) Malheiro, *op.cit.*, p.174.
- (33) 1570 年の法令における先住民奴隷化禁止の動機は, 奴隷制が人間の尊厳と相容れないという考えではなく, 露骨な奴隷化はキリスト教の信仰を広める上で障害となるという考えにあった。
- (34) 1574 年には, 1570 年先住民法の施行細則が出され, 奴隷化を認める要件に 21 歳以上の先住民の「自分自身での身売り」が加えられた。Manuela Carneiro da Cunha, *Antropologia do Brasil, mito, história, etnicidade*, São Paulo: Brasiliense: Editora da Universidade de São Paulo, 1986, p.153.
 また, 1587 年には, 8 月 22 日付で新たな法令が出され, 1570 年の法令の遵守が再確認された。(Malheiro, *op.cit.*, p.176)
- (35) Schwartz, *Sovereignty and Society...*, p.127.
- (36) Francisco Ribeiro da Silva, “A Legislação Seiscentista Portuguesa e os Índios do Brasil”, in Maria Beatriz Nizza da Silva (Org.), *Brasil: Colonização e Escravidão*, Rio de Janeiro: Nova Fronteira, 2000, p.17.
- (37) *Collecção Chronológica de Leis Extravagantes...*, p.132.
Collecção Chronológica da Legislação Portuguesa..., p.271.
- (38) *Collecção Chronológica de Leis Extravagantes...*, pp.132 – 133.
Collecção Chronológica da Legislação Portuguesa..., p.271.
- (39) 植民地時代ブラジルで, 先住民に「絶対的な自由」を与えた, つまり先住民の奴隷化を禁じた三大法令としては, 1609 年 7 月 30 日付けの法令, 1680 年 4 月 1 日付の法令, 1755 年の法令が知られている。[Beatriz Perrone-Moisés, “Índios livres e índios escravos, Os princípios da legislação indigenista do período colonial (séculos XVI a XVIII)”, in Manuela Carneiro da Cunha (org.), *História dos índios no Brasil*, São Paulo: Companhia das Letras, 1ª ed. 1992, 2ª ed. 1998, p.117.] ただし, 1680 年の法令は, 1609 年の法令を復活させたものであり (Malheiro, *op.cit.*, p.192.), 1755 年の法令は, 先住民インディオの奴隷化を禁じたローマ教皇ベネディクトゥス 14 世の大教書 (1741 年 12 月 20

- 日付) およびインディオの自由に関するその他の法令を, 18 世紀になり開発が始まった, 現在のブラジル北部パラ州およびマラニャン地方に適用したものであった。(Malheiro, *op.cit.*, p.208, p.210.)
- (40) F. R. da Silva, “A Legislação Seiscentista Portuguesa...”, p.17.
- (41) *Collecção Chronológica de Leis Extravagantes...*, p.133.
Collecção Chronológica da Legislação Portuguesa..., p.271.
- (42) *Collecção Chronológica de Leis Extravagantes...*, p.133.
Collecção Chronológica da Legislação Portuguesa..., pp.271 – 272.
- (43) Schwartz, *Sovereignty and Society...*, pp.136 – 137.
- (44) *Ibid.*, p.137
- (45) *Loc.cit.*
- (46) *Collecção Chronológica de Leis Extravagantes...*, p.149.
Collecção Chronológica da Legislação Portuguesa..., p.309.
- (47) *Collecção Chronológica de Leis Extravagantes...*, pp.149 – 150.
Collecção Chronológica da Legislação Portuguesa..., p.310.
- (48) *Collecção Chronológica de Leis Extravagantes...*, p.151.
Collecção Chronológica da Legislação Portuguesa..., p.310.
- (49) ブラジルのエンジェーニョ [製糖場を備えた砂糖農園] 数と砂糖輸出量の変遷 (1570 年 – 1610 年) は, 次の通り。(砂糖輸出量の単位は, アローバ。1 アローバ = 14.7kg)
 エンジェーニョ数, 1570 年 60, 1580 年 118, 1600 年 200, 1610 年 400。
 砂糖輸出量, 1570 年 18 万, 1580 年 35 万, 1600 年 280 万, 1610 年 400 万。
 Vera Lúcia Amaral Ferlini, *A Civilização do Açúcar: Séculos XVI a XVIII*, São Paulo: Brasiliense, 1984, p.76.
- (50) Schwartz, *Sovereignty and Society...*, p.139.
- (51) ある先住民集団が他の先住民集団に対して「正当戦争」を発動し, その戦争で捕虜とした者を奴隷とするのは, 正当なことであると考えられた。したがって, 植民者が先住民間の戦争の結果として正当な権原に基づき奴隷とされた者を購入するのも合法であるとされた。理論上は, ある先住民集団の仕掛けた戦争が正当なものであるかどうか証明する必要があったが, 実態としてはそれはしばしば無視された。Cunha, *op.cit.*, p.154.
- (52) 教化村には, 實際上, (1) 先住民の改宗・文明化, (2) 先住民労働者の利用という二つの目的があった。Perrone-Moisés, *op.cit.*, p.120.
- (53) *Loc.cit.*
- (54) *Ibid.*, p.118.
- (55) *Ibid.*, p.123.
- (56) *Loc.cit.*
- (57) *Ibid.*, p.124.
- (58) *Ibid.*, p.127.
- (59) Cunha, *op.cit.*, p.153.
- (60) 1680 年 4 月 1 日付の法令では, 「正当戦争」や「レスガテ」も奴隷化の正当な理由とはしなかった。「レスガテ」によって救出された捕虜は, カトリックに改宗した先住民の村に収容された。F.R. da Silva, “A Legislação Seiscentista Portuguesa...”, p.19.
- (61) 例えば, イエズス会ブラジル布教区の創設者マヌエル・ダ・ノブレガ (1517 – 1570) は, 1549 年 8 月 9 日付のポルトガル管区長シマン・ロドリゲスに宛てた書簡で, ポルトガル人の先住民に対する「サルト (襲撃)」が改宗の妨げになっているとして, 「サルト」によって奴隷とされた先住民すべての解放を命じる総督宛「訓令」を発するよう国王ジョアン 3 世に対して働きかけてほしいと依頼している。Leite, *Monumenta Brasiliae I ...*, pp.118 – 132, p.123.
- (62) Perrone-Moisés, *op.cit.*, p.115.

- (63) Manuela Carneiro da Cunha, “Política indigenista no século XIX”, in Cunha (org.), *História dos índios ...*, p.146.
- (64) ブラジルの先住民奴隷制は、法律上は、独立後の 1830 年代まで継続する。クニャも述べているように、実態としては、先住民奴隷制は、20 世紀にまでおよんだ。Ibid., p.143.
- (65) なお、本稿は、「奴隷化」の問題に限って論じてきたので、イエズス会士の教化村への先住民の「集住」の問題には触れなかった。元来、「集住」は粘り強い説得を介して行なうのが建前である。ところが、「集住」政策を「円滑かつ効率的に」行うには、最小限度にせよ強制力の行使が必要になる。「ブラジル先住民＝人喰い」という「言説」は、宣教師の活動においてそのような強制力の行使を正当化する上で、大きな論拠となり得たのである。宣教師の書簡集を史料として用いる場合には、この点にも注意を要する。
- (66) Sérgio Buarque de Hollanda, *Visão do Paraíso: os motivos edênicos no descobrimento e colonização do Brasil*. 3ª ed., São Paulo: Ed. Nacional, Secretaria da Cultura, Ciência e Tecnologia, 1977, (Brasília, v.333), p.303.

【主要参考文献（先住民法関連）】

Collecção Chronológica de Leis Extravagantes, Posteriores à Nova Compilação das Ordenações do Reino, Publicadas em 1603, Coimbra, Na Real Imprensa da Universidade, 1819 [Por Resolução de S. Magestade de 2 de Setembro de 1786].

Collecção Chronológica da Legislação Portuguesa (1603–1700), Compilada e Annotada por José Justino de Andrade e Silva, Lisboa; [Imprensa de F.X. de Souza], 1854–59, (10 vols.) 1ª volume [1603–1612].

Cunha, Manuela Carneiro da; “Política indigenista no século XIX”, in Manuela Carneiro da Cunha (org.), *História dos índios no Brasil*, São Paulo: Companhia das Letras, 1ª ed. 1992, 2ª ed. 1998, pp.133–154.

Dias, Carlos Malheiro (directão e coordenação de); *História da Colonização Portuguesa do Brasil, Edição Monumental Comemorativa do Primeiro Centenário da Independência do Brasil*, Porto: Litografia Nacional, 1924, Vol.III

Hemming, John; *Red Gold, The Conquest of the Brazilian Indians*, London: Macmillan London Limited, 1978.

Hollanda, Sérgio Buarque de; *Visão do Paraíso: os motivos edênicos no descobrimento e colonização do Brasil*. 3ª ed., São Paulo: Ed. Nacional, Secretaria da Cultura, Ciência e Tecnologia, 1977, (Brasília, v.333).

Kiemen, Mathias C.; “The Indian Policy of Portugal in America, with Special Reference to the Old State of Maranhão, 1500–1755”, *The Americas*, 5 (2) [1948], pp.131–171, 5 (4) [1949], pp.439–461.

Leite, Serafim; *Monumenta Brasiliae I [1538–1553]*, Roma: “MONUMENTA HISTORICA SOCIETATIS IESU”, 1956.

Leite, Serafim; *As Raças do Brasil perante a Ordem Teológica, Moral e Jurídica Portuguesas nos Séculos XVI a XVIII*, Coimbra, 1965, Separata do Vol. III das Actas do V Colóquio Internacional de Estudos Luso-Brasileiros.

Malheiro, Perdigão; *A Escravidão no Brasil Ensaio Histórico, Jurídico, Social*, Petrópolis: Vozes, 1ª ed., 1866–67, 3ª ed., 1976, Vol. I.

Marchant, Alexander; *From Barter to Slavery: The Economic Relations of Portuguese and Indians in the Settlement of Brazil, 1500–1580*, Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1942, (reprinted Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1966).

Marchant, Alexander; *Do escambo à Escravidão, As Relações Econômicas de Portugueses e Índios na Colonização do Brasil, 1500–1580*, Tradução de Carlos Lacerda, 1^a. ed., 1943, 2^a. ed.: Companhia Editora Nacional - INL/MEC, 1980, (Brasília; v.225).

Perrone-Moisés, Beatriz; “Índios livres e índios escravos, Os princípios da legislação indigenista do período colonial (séculos XVI a XVIII)”, in Manuela Carneiro da Cunha (org.), *História dos índios no Brasil*, São Paulo: Companhia das Letras, 1^a. ed. 1992, 2^a. ed. 1998, pp.115–132.

Ramos, Alcida; “From Eden to limbo: the construction of indigenism in Brazil”, in George C. Bond & Angela Gilliam (edited by), *Social Construction of the Past-Representation as power-*, London: Routledge, 1994, pp.74–88.

Silva, Francisco Ribeiro da; “A Legislação Seiscentista Portuguesa e os Índios do Brasil”, in Maria Beatriz Nizza da Silva (Org.), *Brasil : Colonização e Escravidão*, Rio de Janeiro: Nova Fronteira, 2000, pp.15–27.

Silva, Maria Beatriz Nizza da; *História da Colonização Portuguesa no Brasil*, Lisboa: Edições Colibri/Grupo de Trabalho do Ministério da Educação para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1999.

Schwartz, Stuart B.; *Sovereignty and Society in Colonial Brazil-The High Court of Bahia and its Judges, 1609–1751* -, Berkeley: University of California Press, 1973.

東 明彦「16世紀ブラジルの先住民と奴隷制」, 科研報告書『「グローバル・ヒストリー」の構築と歴史記述の射程』(大阪外国語大学, 2000年)所収, pp.99–108。

東 明彦「植民地期ブラジルの先住民像に関する一考察, -W.アレンズ著『人喰いの神話』に対するD.W.フォーシスの批判を中心に-」, 『Anais-日本ポルトガルブラジル学会(AJELB)年報』(Vol.35, 2005年)所収, pp.1–20.

(2005. 12. 21 受理)